

# 「新しい時代のための新たな批判理論」を目指して

——ウェンディ・ブラウンの新自由主義批判を

『啓蒙の弁証法』から読み解く——

藤本 ヨシタカ<sup>i</sup>

現代のアメリカを代表する政治哲学者ウェンディ・ブラウンは、名著『デモスの崩壊』において、ミシェル・フーコーに倣って新自由主義を「理性の規範的命令」と捉えたうえで、かかる競争的規範が市場経済を超えて国家の統治技術として取り込まれていく事態を明らかにした。こうしたブラウンの議論は、民主主義と人間の生すべての次元への新自由主義の破壊的浸透力を明らかにしたものとして広く注目を集めているが、一方で彼女は『デモスの崩壊』の3年後に発表した論文で、さらに緻密な新自由主義批判を展開している。そこでは「新しい時代のための新たな批判理論」を展開するというスローガンの下、かつてフーコーの強調した新自由主義的理性が「21世紀の権威主義」へと変容を遂げていった歴史的経緯について論じられている。本稿では、ブラウンの議論をもとに現下の新自由主義時代において「新たな批判理論」を打ち立てるための糸口を探るという目標を掲げ、かかる論文が「新自由主義のフランケンシュタイン」と題されたねらいと意義を明らかにした。それは、「現代版・啓蒙の弁証法」とでも呼ぶべき“新自由主義的理性の野蛮への転落”という事態を指し示すものであったと考えられる。

キーワード：ウェンディ・ブラウン、新たな批判理論、新自由主義的理性、権威主義的自由、フランケンシュタイン、啓蒙の弁証法

## 1. 背景と目的

新たな批判理論を展開することは、非常に困難なことである。しかし、この世界の研究者であるという稀なる特権が、私たちに、ためらいながらも失敗のあらゆるリスクにもかかわらず挑戦するように要求する。(Brown, W. 2018: 9=2021: 66)

これは、現代のアメリカを代表する政治哲学者ウ

ェンディ・ブラウンの論文「新自由主義のフランケンシュタイン——21世紀『民主主義』における権威主義的自由」(Brown 2018=2021)の中の一節である。本稿の目的は、このブラウンの挑戦的な論文をもとに、現下の新自由主義時代において「新たな批判理論」を打ち立てるための一つの糸口を探ることにある。その際、「批判理論」とはフランクフルト学派のそれを指し、本稿では学派の第一世代を代表するマックス・ホルクハイマーとテオドール・W・アドルノによる『啓蒙の弁証法——哲学的断想』(Horkheimer und Adorno 1947=2007)と最終的に関わらせることで、ブラウンの議論を「新たな批判理論」として読み解くための糸口を探りたいと考え

i 立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員

ている。

日本においてブラウンの名は、『デモスの崩壊——新自由主義の見えざる革命 (訳題: いかにして民主主義は失われていくのか)』(Brown 2015=2017) という著書で最もよく知られているのではないかと思われる。政治哲学・政治思想史を専門とするブラウンは、カール・マルクスやフリードリヒ・ニーチェ、ミシェル・フーコーなどをたよりに、主にフェミニズムの立場からヨーロッパ大西洋における自由民主主義体制を批判的に検証し続けてきた。『嫌悪の規制——アイデンティティと帝国の時代における寛容 (訳題: 寛容の帝国)』(Brown 2006=2010) などにその成果がまとめられているが、これらの著書を発表後、ブラウンの議論はさらに発展を遂げ、自由民主主義を密かに浸食・改変しすっかり食い潰すこととなった新自由主義の複雑な様態に、近年は専ら批判的関心が注がれている<sup>1)</sup>。

『デモスの崩壊』はそうした新自由主義に対する独自の批判が展開された主著といえるが、そこでは『生政治の誕生』(Foucault 2004=2008) に示されたフーコーの新自由主義論に依拠しつつも、さらにフーコーに不足している批判的観点を導き出すことに主眼が置かれている。議論の背景として、以下ではまずその概要を整理しておこう。

### (1) 『デモスの崩壊』におけるブラウンの新自由主義批判の主眼

ブラウンによると、フーコーの議論において特筆すべき点は、新自由主義を一種の「理性の規範的命令 (normative order of reason)」(Brown 2015: 117=2017: 130 以下 UD と略記) と捉えようとした点にあるという。そのうえでブラウンは、「その命令が優勢になるとき、それは経済的価値、実践、方法に特有の定式を人間の生のすべての次元に拡大する、統治合理性のかたちをとる」(UD 30=26) と述べている。言い換えるとそれは、「ホモ・エコノミクス化」と呼ぶべき「経済化」が「自己の存在のすべての領域」(UD 33=29) へと拡大していく事態であり、

ブラウンによるとフーコーはそうした事態を、「市場のもつ競争的な規範が国家の統治技術として取り込まれ、政治のあり方が新自由主義的なそれへと転換されていく事態」として把握していたという。

ブラウンはこうしたフーコーの視点を大筋で継承しつつも、彼に欠けていた問題関心、すなわち、かかる事態が現行の「民主主義」とその正統な実践主体である「ホモ・ポリティクス」にいかなる重大な影響を及ぼしうるかについてさらに詳細に論じている。ブラウン曰く、人間を「人的資本」、すなわち「資本の投資と評価の観点から規定する」(UD 176=201) ホモ・エコノミクス化においては、市民は単なる「投資家ないし消費者にされ、権力および特定の公共財、公共空間、公共の経験を共有する民主主義的な政体の構成員ではなくなっている」(UD 176=202) ぐ。それは、新自由主義が得意とする緊縮財政に伴う「市民の犠牲の共有」という観念を密かに保持しながら、「能動的な市民性<sup>シテイズンシップ</sup>の占めるべき重要な場所や市民性の意味そのものを縮小させてしまう」(UD 210=243) 事態である。その結果、「集約的な政治的主権を主張する人民、すなわちデモスという概念そのものも消滅」(UD 39=37 以下、下線は引用者) を余儀なくされる。このように「社会的なもの (the social)」の観念を放棄し、さらに政治を「ガバナンス」に置きかえる新自由主義的 (合) 理性は、ブラウンによると、自らを規定する経済用語を単に新しい統治技術のための政治言語とするだけでなく、あろうことか「意図的に反政治的な言語」(UD 77=83) へと転換し、国家や企業、学校、非営利団体等へと広く浸透させる。そのやり方は実に巧妙であり、佐貫浩による書評の表現を借りれば、「民主主義の規定そのものを『経済的合理性』の規範から改変し、人々の認識の中に入り込んでそれを改造することで、民主主義の価値を人々の頭脳の中から剥奪するという戦略をとっている」(佐貫 2019: 206)。『デモスの崩壊』の副題にあるように、まさに内側からの「見えざる (stealth) 革命」ないし攻撃が爾々と展開されているのである。

## (2) 『デモスの崩壊』へのこれまでの主な言及

以上が『デモスの崩壊』の概要であるが、本書をめぐっては、これまで政治哲学のみならず、フェミニズム研究や教育学など様々な分野から言及がなされている。分野こそ多岐に亘るものの、それらに概ね共通しているのは、『デモスの崩壊』におけるブラウンの新自由主義批判が現実世界ないし現実社会の動向をどこまで厳密に捉えられているかといった、経験的な妥当性に主な関心が寄せられている点である。たとえば以下のような言及がある。

まず、ブラウンの議論を概ね肯定的に評価している論者としてパッチェン・マーケル（2017）が挙げられる。マーケルは『デモスの崩壊』を、「理論的に緻密で、慎重に歩みを進め、私たちの現在と直近の過去に関する豊富かつ詳細な記述に注意深く根差している」（Markell 2017: 520）と評したうえで、本書の特徴の1つとして、“totalizing”とでも呼ぶべき表現が多用されている点を挙げている。マーケルのいう“totalizing”とは、たとえば「つねにどこでもホモ・エコノミクスでしかありえない」（UD 31=27）という表現に見られるように、新自由主義的理性の影響を「すべての領域と活動へ」（UD 31=27）と至るものと捉える見方のことである。こうした捉え方には敗北主義に帰するのではないかという非難も予想されるが、マーケルはむしろ、かかる“totalizing”とでも呼ぶべき表現を、「新自由主義的合理性による世界の再構成化という現実の傾向を捉えている」（Markell 2017: 521）として肯定的に評価している。それはマーケルによると、私たちが覆う逃避不可能性という感覚を精確に描写するだけでなく、逆説的ではあるが私たちに抵抗を呼びかけ、「オルタナティヴへの欲望を駆り立てる」（Markell 2017: 521）役割をも果たしているという。この抵抗とオルタナティヴの可能性に関してはブラウン自身も『デモスの崩壊』でわずかながら論じているが、マーケルは、ブラウンのいうホモ・エコノミクスの拡大が資本主義へと単純化できないものであり、またそれゆえに資本主義と本質的に調和しないものである点から、か

つてマックス・ヴェーバーやマルクスが想定していた「資本主義とは調和しない政治という外部と主体という内部」（UD 111=126）すらも“totalizing”しようとする新自由主義の暴力性と、それに対する抵抗とオルタナティヴの可能性とを同時に読み取ることができると考えている（Markell 2017: 522）。

他方で、箱田徹（2018）のように、「この道しかない」という新自由主義が得意とするスローガンに対しブラウンが掲げた抵抗のあり方に、批判を投げかける論者もいる。箱田は、『デモスの崩壊』で展開された批判的議論がとりわけ安倍政権以降の経済政策や各種教育改革の実態にも当てはまる部分が多いと述べ、ブラウンの議論に一定の有効性を見出している。だがその一方で箱田は、ブラウンが新自由主義的現状に抵抗する左派の批判的プロジェクトを「別の世界は可能だ」式の主張で再確認し、アリストテレスにまで遡るホモ・ポリティクスの理念の復権——『『善き生』による『ただの生』への批判』（箱田 2018: 65）の展開に向けたそれ——を目指している点については、ブラウンが想定する以上に高度な人的資本化がすでに私たちの間に進行しているとして率直には受け入れがたいという態度をとっている。このように、箱田の評価とマーケルの評価は根本的に対立するものであるが、しかし両者とも、ブラウンの新自由主義批判が現実世界を把握する議論として経験的に妥当なものであるかということに主な関心が向けられている点は、共通しているといえよう。

## (3) 本稿の目的

本稿では紙幅の関係上、そしてまた後述のように問題関心の方向性が根本的に異なる以上、箱田をはじめとした現実を把握する議論としての経験的妥当性を問う批判<sup>2)</sup>に対し、ブラウン自身がいかなる応答可能性を有しているかをつぶさに検討する余地はない。ただし一点だけ触れるとすれば、先の箱田が示した批判に関してはブラウン自身も多少なりとも自覚していたのか、後年の論文では左派による抵抗

戦略の困難さを率直に吐露している(後述)。そしてそれに合わせて、新自由主義の論理、実践、そして帰結に関する考察そのものも、より緻密さを増すとともに深刻な様相を呈している。『デモスの崩壊』の3年後に発表された「新自由主義のフランケンシュタイン」(以下「フランケンシュタイン」論文と呼ぶ)こそが、そうした深遠かつペシメスティックな考察を深めた論文に他ならない。

以上を踏まえ本稿では、かかる「フランケンシュタイン」論文に焦点を絞り、その概要とポイントを可能な限り詳細におさえたうえで、前著『デモスの崩壊』について言及したこれまでの論者たちとは異なる切り口と問題関心からブラウンに迫りたいと考えている。端的にいうと本稿では、ブラウン自身も目標に掲げながら十分明確には論じ切れていないと考えられる、「私たちの新しい時代のための新しい批判理論 (new critical theory for our new age)」(Brown 2018: 9=2021: 67 以下 NF と略記)としてブラウンの議論を積極的に読み解き再構成する糸口を探りたい。次章で見ると、この論文にはヘルベルト・マルクーゼの名が登場し、ニーチェ、そして部分的にはジグムント・フロイトへの言及もある。その点でこの論文は、一経済政策としての側面が根強い新自由主義に対し、ニーチェならびに精神分析の諸概念を活用することで、現代社会の文化的上部構造への影響と個人の内的側面との関連性を重視した社会文化論的-社会心理学的観点からアプローチした成果といえる。こうした形でマルクス主義的な分析モデルを補強しようとするやり方は、マーティン・ジェイ (1973: 84-5=1975: 111-2) も述べるように、かつてホルクハイマーらが構想した批判理論の方法的基盤そのものであるといえるだろう。

しかしながら筆者は、そうした学際的な分析方法の次元に留まらず、それら各分析方法をさらに根本から支えうる本源的な「歴史哲学」の次元において、批判理論の知的系譜との連続性を見出したい。すなわち、近代化の原動力となった「理性」主義をめぐる限界と逆説を「啓蒙」という思想的営みの次元で

把握しようとした名著『啓蒙の弁証法』と最終的に関わらせることで、ブラウンの議論がいかに批判理論の歴史哲学的系譜を受け継ぐものであり、かつそこからいかなる「新たな批判理論」を展開しようものであるかを明らかにしたいと考えている。

出口剛司が述べるように、『啓蒙の弁証法』という著作は、ナチスによる権威主義的支配をはじめとする当時の困難な現実社会を、「それ自身が実証的に問われるのではなく、啓蒙的理性による自然支配という歴史哲学的視座において把握される」(出口2002: 13)べきものと捉えた。思弁的だというネガティブな印象を与えるリスクがありながらも、こうした視座を貫徹することによってホルクハイマーとアドルノは、当時の「全体主義という社会現象を批判しようとするわれわれ自身の知的批判能力、すなわちすべての学的認識を支える理性 (Vernunft) そのものが、すでにして全体主義的支配の萌芽であるという透徹した認識を得ることができ」(出口2002: 13)たのである。本稿もまた、「理性」としての新自由主義に鋭い批判を投げかけるブラウンの議論にアプローチする以上、先に紹介したような経験的な妥当性を問う一切の議論から一旦距離を置くとともに、『啓蒙の弁証法』という歴史哲学的視座の只中において、新自由主義という新しい時代を生きる我々自身の理性ないし知的認識のありようを批判的に検討せねばならない。かかる思弁的かつ抽象的で、そしてまた知的アポリアへと陥る危険性を孕んだ思索を通じてこそ、ブラウンの議論を「新しい時代のための新たな批判理論」として本格的に再構成する糸口が明らかになるものと筆者は考えているのである。

## 2. 「フランケンシュタイン」論文の概要とポイント

「フランケンシュタイン」論文では、翻訳者の1人である日暮雅夫 (2021: 213) も述べるように、かつてフーコーが強調した新自由主義的理性が、その後いわゆる「21世紀の権威主義」へといかにして変容

を遂げていったかという点に主たる関心が向けられている。本章ではこの点を中心に概要とポイントをおさえていきたい。

### (1) 新自由主義的理性から「現代の権威主義」へ： ルサンチマンとニヒリズムという観点から

欧米において新自由主義が具体的な経済政策として現実化したのは1980年代以降である。しかしブラウンは、第二次世界大戦直後にフリードリヒ・ハイエクが会長を務めたモンペルラン協会の設立時点にまで遡り、そこで打ち出された新自由主義的思想、とりわけその根幹をなす（個人の）「自由」に込められた反ファシズム的思想にまずは着目する。端的にいうとそれは、隷属への道である「社会的なもの（the social）」と「政治的なもの（the political）」の領域から一線を画した、「市場と道徳との結合によってもたらされるダイナミックな秩序」（NF 13=71）を自生的に発展させる「個人的な保護された領域」の拡張であった。

ブラウンによると、ハイエクによる「自由」の擁護には、市場の「自生的秩序と発展の原動力として交換を競争へと置き換え、それゆえ競争がすべての領域において導入されすべての主体に浸透することを求める」（NF 16=74）傾向があるという。こうした競争主義は今日の新自由主義の問題性とも関わる部分であろう。しかしながら、ブラウンの関心はそこに留まらず、このような当初の新自由主義的思想が、現在至るところで見られる民主主義的諸価値を容赦なく攻撃する「権威主義」、ならびにそれと奇妙な形で混成された「権威主義的自由（authoritarian freedom）」なるものが「家族」的価値観を通じて保護主義的な国家を求めるといった正反対の帰結へと、何故に陥ってしまったのかという点に向けられている。それらはまさに、ハイエクから新自由主義的知識人たちが最も拒絶し排斥しようとした悪夢そのものであった（NF 34=91）。ブラウンはこの問題を、主にはドナルド・トランプ政権誕生の原動力となった白人男性至上主義ナショナリズム（排外主義、自国

第一主義）の爆発、ならびにその背後に横たわる新自由主義的経済政策と「獐猛なグローバルイゼーション」とによる彼らの社会経済的地位低下といった現実問題を視野に、歴史的に追究しているのである。

その際ブラウンは、ニーチェの「ルサンチマン」と「ニヒリズム」、そしてマルクーゼの「抑圧的脱昇華」という概念をたよりに、上記のような“反転的帰結”へと至った歴史的経緯をさらに詳細に跡付ける。まずニーチェに関しては、自らの社会経済的地位を喪失した白人（男性）至上主義者らの、怒りと屈辱にまみれた情動的エネルギーの分析に用いられる。つまりルサンチマンは、不当に傷ついた権力の怒りとそこから湧き出る右派ナショナリズムないしポピュリズムの不可欠なエネルギー源の分析に用いられ（NF 26=83）、ニヒリズムは、価値そのものが消え去るわけではないものの、その土台が失われることによる変幻自在な商業的ないし政治的諸価値の道具（ブランド）化と、フェイクニュースが盛んに飛び交うポスト<sup>トゥルース</sup>真実状況に象徴される真理と理性の土台喪失といった現象の分析に用いられる（NF 26-8=83-5）。特徴的なのは、こうした現代に特有のルサンチマンやニヒリズム（的主体）が、明確に反社会的な性質を持っていることである。そして、そうした「社会的なものをけなし枯渇させることと相まって」（NF 28=85）発動されるロジックが「自由」なのである。

### (2) 反社会的自由主義者の内的メカニズム：抑圧的 脱昇華という観点から

もっとも、彼らのいう「自由」とは、「その結果を考慮することなく好きなことを行い、言う自由となり、困難、傷つきやすさ、他の人間や他の種や地球の運命を心から配慮しない」（NF 28=85）ような「醜い自由」である。だが、こうした「反社会的性質」と「自由」の追求は、表面上はかつてハイエクが打ち出した新自由主義的思想と重なる。つまり彼らは、こうして新自由主義的知識人たちの〈理想〉を一方で共有しつつも、他方では〈経済政策〉として現実

化した新自由主義によって苦しめられるという極めて矛盾した立場に置かれているのである。その結果、ブラウンによると、彼らはかつての理想を、今度は「権力への意志をめぐる脱昇華 (desublimation)」（NF 28=85）という歪んだ形で具現化するという。そして、「文明や地球の未来が燃え落ちることを祝う自由の祝祭」（NF 29=86）、ひいては政治的自己決定の全放棄へと至るというのである。

マルクーゼは、この「脱昇華」と呼ばれる極めて複雑な内的プロセスを分析する際に用いられる。ブラウンによると、ニーチェ自身がニヒリズムを通じて想定した事態は、あくまで権力への意志をめぐる「昇華 (sublimation)」を通じた価値と世界の新たな樹立であった (NF 28=85)。「昇華」とは精神分析における重要概念の一つであり、エロスの欲動とそれが持つエネルギーを、性的なものに象徴される社会的に認可されたい欲求や目標から、各種文化活動や芸術活動といった社会的に認可されかつ価値のある目標・対象へと代替的に振り向ける防衛的働きを指す。ニーチェが称揚したニヒリズムとは、まさにこの昇華という働きに裏付けられた文化的創造性を目指すものであったのである。ところが、現代のトランプ主義に象徴されるニヒリズムはどうか。ブラウン曰く、現代のトランプ主義にみられるニヒリズムは、かかる昇華とその産物たる文明がもつ「倫理や謙遜から解放された権力の行使以上のことである」(NF 28=85)。ブラウンによると、まさにそれはマルクーゼのいう「抑圧的脱昇華 (repressive desublimation)」と呼ぶべき性質を兼ね備えているというのである。それは一体どういうことなのか。

マルクーゼによると、本来、資本主義的近代を特徴づける意識形態というのは、労働における疎外に発する「不幸な意識」と呼ぶべきものであった。しかし同時に、そうした意識は、フロイトが定式化したように「良心」の帰結とも捉えられる。というのも、その良心が「直ちに内的抑制のための超自我的集積の要素となり、社会に関する道徳的判断の源泉となる」(NF 30=87) ことで、「不幸な意識」の持続

(Marcuse 1964: 61=1980: 81) という形で過酷な労働との均衡を保つからである。そしてその際、こうした抑圧と引き換えに「欲望は昇華され、文化や道徳、芸術を生み出す」(日暮 2021: 214) ことになる。

ところがマルクーゼによると、資本主義の発達に伴い、「欲望がいたるところで、増大する中流階級によって享受される商品文化と結びついた」(NF 30=87) 時代では、こうした〈抑圧〉と〈昇華〉との緊張関係は失われてしまう。つまり、厳格な検閲機関である超自我に執行猶予が与えられることで「幸福な意識」が生み出されるというのである。そこでは良心の本来の役割が失われ、あろうことか「社会的不正や悪 … [中略] … との関係においてもくつろげる」(NF 30=88) ようになる。つまり、倫理や正義といったものにおおよそ無関心でありながら、「順応性があり操作可能で、自律性も、道徳的自己抑制性も、そして社会的理解力も枯渇させながら、快楽を言って回り、攻撃的で、そして自らの境遇の破壊性と支配とに意固みに結びつい」(NF 35=92) た「反動的主体 (reactionary subject)」が生み出されるというのである。

### (3) 「反動的主体」の生成をめぐる2つのポイント

ブラウン曰く、この「反動的主体」と呼ぶべき存在こそが、脱昇華的で脱抑制的な〈快楽〉と〈攻撃性〉の両方によって形作られた、現代のトランプ主義者に象徴されるニヒリズムの主体の姿に他ならないという。だがここで2つの疑問が生じる。第1に、先の引用文にもあるように道徳的な自己抑制性を枯渇していながら、何故この反動的主体は未だ“抑圧的”脱昇華の産物と呼ばれるのか。そして第2に、“脱昇華”ということは、この反動的主体は一切の文化(的活動)と切り離された存在と見るべきなのか。ブラウンはこれらの疑問に関して、以下のように考察を進めている。

まず1つ目の疑問に関して、ブラウンは、この〈快楽〉と〈攻撃性〉との両方によって形作られる脱昇華的な反動的主体の背後に、特有の抑圧構造が働い

ている点を見出す。すなわちそれは、かつてマルクーゼが先進産業社会の研究において見出したのと同様の（Marcuse 1964: 73=1980: 93）、性的欲求の範囲拡大に伴う「エロスのエネルギーの圧縮や集中」（NF 32=89）という事態である。先述のように、エロスの欲動とそのエネルギーは、本来、昇華の働きを駆動する源泉でもあった。ところが、そのエロスのエネルギー自体が性的欲求の範囲拡大に伴い圧縮されてしまうことで、昇華に用いられる範囲は狭められてしまう。そうしてエロスは、「自由」のために解放されることがある反面、あろうことかタナトスの蛇口を開けることで「攻撃性を奮起させ、攻撃性と混ざりあい、攻撃性を強めさえする」（NF 32=89）こととなる。以上がブラウンの考える“抑圧的”脱昇華と呼ばれる事態とその帰結である。

次に第2の疑問に関しては、ブラウンは反動的主体の経験が「新自由主義的文化そのものによって肯定されている」（NF 35=92）と述べたうえで、脱昇華と聞いてイメージされるような一切の文化との影響関係から切り離された状態を退ける。このことは「理性」や「道徳」に関しても同様である。上記のように、確かに反動的主体の良心はほとんど枯渇しているが、「そのわずかな残存物は、市場の理性と市場の要求とによって取り去られる。実在するものは、理性的なもの (the rational) と道徳的なもの (the moral) との両方となる」（NF 33=90）というのである。反動的主体は、社会に対し攻撃的で破壊的であるが、ブラウンによると、そうした性格は（あろうことか）市場原理主義という名の理性や道徳、文化によって吸収されつつ下支えされるというわけである。そしてここでもまた、かつてマルクーゼが見出したのと同じ状況が現れる。それは〈快樂原則〉と〈現実原則〉との融和である（NF 30=87）。つまり「快樂は、労働の骨折り仕事や搾取への暴徒的な抵抗である代わりに、資本の道具となり服従を生み出す。快樂は、危険ないし対抗的なことから程遠く、もはや美学やユートピア的な幻想にこもることもなく、機械装置の一部となる」（NF 30=87）のである。

そしてこのような対立関係を脱した融和状態は、ついに国家に対する具体的な態度へと反映される。反動的主体は単に反政治的であるだけでなく、民主主義そのものを破壊しようとする新たな政治権力の担い手を現実として希求する。つまり、先述のような攻撃的で醜い自由を一方で求めつつも、「内的なそして外的な非自由主義、移民排斥的なナショナリズム、そして権威主義」（NF 34=91）といった服従に足る要素を、「経済面でも安全保障の面でもパターンリスティックな保護主義という形態」（NF 34=91）を持った国家の中に求めるのである。ここにブラウンは、21世紀に現れた「権威主義」と「自由」との奇妙な調合物の姿を見て取る。すなわちそれは、新自由主義的な市場原理主義をエネルギー源としつつも、その枠組みには到底収まりきらないような自国第一主義的、白人男性至上主義的、異性愛主義的、家族主義的、反民主主義的、そして権威主義的な国家観を掲げ、かつそうした強大な国家の力とそれによって保護された市場の理性・道徳・文化に——実際は搾取されているだけなのだが——支えられているという意識のなかで“傍若無人に振る舞える自由”を愛する「反動的生き物=被造物 (creature)」の姿である。

社会契約なき自由、民主主義の正当性なき権威、そして価値や未来なき復讐心を抱き、新自由主義的理性とその帰結によって形作られた、被害者意識を持った反動的な生き物 (reactive creature) を見るがいい。それは、ハイエクとその知的系列にいる者たちによって想定された、計算でき、起業家精神があり、道徳的で、訓練された存在からはかけ離れ、怒り、非道徳的で、そして衝動的であり、内に秘められた屈辱と復讐への渴望とによって駆り立てられているのである。このエネルギーの強大さはそれ自体においてすさまじく、そして金権政治家、右派政治家、さらにそれらを刺激しかつ愚かなままにすることに没頭するタブロイドメディアの王様に

よって容易に搾取されている。(NF 35=92)

### 3. 「フランケンシュタイン (的帰結)」とは どういうことか

#### (1) 前著『デモスの崩壊』からの発展

以上が「フランケンシュタイン」論文の概要とポイントである。先述した『デモスの崩壊』に対する批判と同様に、この論文に関しても、現行の新自由主義的な状況とそこに置かれた人々の心理をどこまで厳密に捉えたものであるのか、経験的妥当性の観点から疑問に感じる部分がないわけではない。しかしながら、この論文で展開されたブラウンの議論を「新たな批判理論」として再構成するという本稿の目的からすると、経験的な分析理論としての妥当性・精確性を検証するのは別に、早急に解明せねばならないことがある。それは、何故この論文が「新自由主義のフランケンシュタイン」と名づけられたのか、そのねらいを明らかにすることである。この問題に取り組むべく、本章ではまず、この論文が前著『デモスの崩壊』からいかなる内容的な発展を遂げているのかを明らかにしたい。筆者の見限り、少なくとも以下の3点が挙げられるのではないかと考えられる。

第1に、単なる〈新自由主義〉批判から現代に特有の〈権威主義〉批判へ、単なる〈ホモ・エコノミクス〉研究から様々な要素を併せ持つ〈反動的主体=生き物〉の研究へ、というように、批判の対象がそれぞれの文脈において複雑かつ深刻な方向へと発展的に移行している点が挙げられる。またそれらにあわせて、〈新自由主義的統治理論としての(合)理性〉の研究から、「現代の右派の政治的編成と表現に形と内容とを与える感情的エネルギー」(NF 23=81)の研究へと発展を遂げている点も見逃すことはできない。こうした思索的発展の背景として、『デモスの崩壊』における主たる批判対象であったバラク・オバマ政権からトランプ政権への交代という現実的な事情が指摘できるが、ともあれ「フランケンシュタ

イン」論文では、理性としての新自由主義に加え、その影響を多分に受けた側の感情的な動きにも鋭い批判の目が注がれているのである。

第2に、『デモスの崩壊』ではかろうじて希望が語られていた、左派の手によるホモ・ポリティクスと民主主義の復権の可能性について、この論文では徹底して悲観的に語られている点が挙げられる。論文の最後は、明らかに非民主主義的な権力を支持しようとする「論理とエネルギーとが現在の困難な状況に対する左派的な応答の諸側面を形作っているあり方も、検討する必要に迫られている」(NF 36=93)と締められており、社会領域のみならず政治領域でもオルタナティヴを容易に見出すことの困難な状況が指摘されている(NF 33=90)。

そして第3に、これが最も目を引くのだが、戦後の反ファシズム的思想(ハイエク)に始まり、文化産業の発展に伴う先進資本主義社会の到来(マルクーゼ)、新自由主義的経済政策(サッチャー、レーガン政権)、グローバル金融資本主義の到来、そしてトランプ政権誕生に至るまでの、思想と現実両面での長期的な視野を通じて、新自由主義的思想・経済・政治をめぐる“反転的帰結”を緻密かつダイナミックに跡付けている点が挙げられる。この反転的帰結こそが、論文の表題に掲げられた「フランケンシュタイン」の意味するところではないかと考えられるのだが、筆者はこうしたブラウンの着想に、あの『啓蒙の弁証法』に連なる批判理論の歴史哲学的モチーフを感じ取ってやまない。すなわちそれは、“野蛮からの解放をもたらすはずの啓蒙(的理性)が野蛮へと転落していく過程”の解明である。かかる本稿における主たる問題関心へと本格的にアプローチすべく、次に物語としてのフランケンシュタインと比較しながら、ブラウンが自身の見出した反転的帰結を「フランケンシュタイン」と命名したねらいと意義について検討していきたい。

#### (2) 物語としてのフランケンシュタインとの比較検討 周知のようにフランケンシュタインとは、19世紀



初頭（初版は1818年）にメアリー・シェリーが発表した元祖 SF 小説のタイトルである（Shelley [1818] 1998=2015）。この小説のメインストーリーを話の展開に沿って整理すれば、以下のとおりとなる。

- ①「生命の起源」に関心を抱いた若き化学者ヴィクター・フランケンシュタインが、墓地や解剖室などから材料をかき集め、ついに禁断の「生命の創造」に成功する。
- ②ところが、出来上がった被造物（creature）は、あまりに醜い容姿をした「怪物」そのものであった。人間たちから拒絶されたその被造物は、激しい憎悪の念に駆られ、住処としていた小屋に火を放ち、ヴィクターの家族・友人へと次々に襲いかかる。
- ③一方で被造物は、最初こそ言葉は話せなかったものの、独学で言葉を学び、森で偶然拾った本を読み様々な知識も獲得していった。自身を見捨てたヴィクターと再会した際、被造物は、自身の孤独で不幸な境遇は創造主たるヴィクターに責任がある、これ以上の悲劇を止めたければ自身の伴侶を制作せよ、と雄弁に語るまでになっていた。

ブラウンは、論文の主題に「フランケンシュタイン」と記してはいるものの、本論でその意味するところを明らかにしているわけではない。しかしながら、上記のストーリーに鑑みると、その意味するところは概ね明らかとなろう。

まず①が意味することとして、長きに及ぶ新自由主義的統治の結果生み出された「反動的生き物＝被造物（creature）」が、ヴィクターの作り上げた被造物のように様々な材料から成り立ったものであるという点が挙げられよう。つまり日暮（2021: 213）も指摘するように、少なくとも〈ハイエクら新自由主義的知識人たちが打ち出した構想〉と〈ニーチェのいうルサンチマンとニヒリズム〉、そして〈マルクーゼのいう抑圧的脱昇華〉などといった複数の要素が、反動的生き物を形作る材料となっている。ここで重要なのは、ヴィクターの作り上げた生き物がいびつ

な見た目の怪物そのものであったように、それぞれの材料が本来はお互い質的に馴染み合うものではないということである。昇華を本質とするはずのニヒリズムが脱昇華と結びついてしまうように、互いの部品は一方で歴史的な連続性を有しつつも、質的な面では根本的な不連続性を抱えている。この不連続性ないし相互矛盾を解きほぐすことが、批判理論の重要な役割の一つといえるだろう<sup>3)</sup>。

次に②に関しては、ハイエクら新自由主義的知識人たちが当初想定していた理想とはほど違い結果となってしまった、という反転的帰結がその意味するところと考えられる。いやそれ以上に、反動的生き物は——被造物が自らを作り出したはずの創造主ヴィクターから名前すら付けられないまま見捨てられたように——教養を持つグローバルな人材によって周縁へと押しやられ、“すっかり忘れられてしまった人々”として細々と生きるのを余儀なくされる。その結果、彼らは、ハイエクらが当初想定していた「計算でき、起業家精神があり、道徳的で、訓練された存在」（NF 35=92）といった理想像そのものを攻撃と破壊の対象とすることになる。まさにそれは、自らを見捨てた創造主ヴィクターを追い詰め最終的に亡き者とする被造物の姿と重なる<sup>4)</sup>。

こうした反動的生き物の姿は、ブラウンのいうように、「怒り、非道徳的で、そして衝動的であり、内に秘められた屈辱と復讐への渴望とによって駆り立てられている」（NF 35=92）。しかし彼らはまた、既述のように、市場的理性や道徳、文化によって吸収ないし搾取されつつそれらに支えられてもいる。この一見矛盾した姿こそが、③の内容に相当すると考えられる。つまりその姿は、再会したヴィクターに対し怒りと憎悪をぶちまけつつも、他方では言葉巧みな経緯の説明と脅迫・交渉を通じて冷静な一面を見せ、さらには自らの怒りと憎しみが理に合った感情であることを明確な言語でもって伝えた、あの怪物の姿と重ね合わされるのである。

反動的生き物は、確かに、「社会的なもの」と「政治的なもの」とに対する攻撃という形で民主主義的

規範・正当性・価値を容赦なく破壊しようとする。しかしそうした破壊欲動は、あろうことか——ニヒリズムが「諸価値の完全消失」ではなく「諸価値の変幻自在なものへの変容」を意味する点に現れるように (NF 27=84)——伝統的な諸価値や道徳とも変幻自在に密着することの可能な新自由主義的理性ないし道徳によって駆り立てられているのである。もっともブラウンは、そうした新自由主義的市場原理主義によって称揚される理性や道徳を「理性的なもの (the rational)」「道徳的なもの (the moral)」と表現し、ある種の欺瞞性と似非感とでもいべき性格を匂わせているものの、このように新自由主義の問題点とそれへの批判の難しさを「理性」をめぐる変節という観点から捉えようとするブラウンの発想は、前著『デモスの崩壊』から徹底して貫かれているといえよう。

### (3) 〈理性〉と〈神話〉の物語としてのフランケンシュタイン

最後の論点、とりわけ新自由主義が理性の形態をとりつつ伝統的な諸価値や道徳とも容易に結びつくという点は、「フランケンシュタイン」論文を「新たな批判理論」として読み解くにあたって極めて重要である。この論点を掘り下げるべく、今いちど小説版のフランケンシュタインに目を向けよう。

この物語をめぐるのは、これまで夥しい数の文芸批評がなされ、また度重なる映画化や舞台化を通じて解釈がなされてきた。そのなかで筆者が着目したいのは、小説執筆時のヨーロッパを取り巻く社会状況、すなわち、2つの革命——フランス革命と産業革命——をめぐる騒乱と矛盾という観点から物語を分析したいいくつかの論考である。たとえばクリス・ボルディックによると、この物語は、

フランスとイギリスでの社会上、産業上の二つの革命から始まる時代の不安を留めている。封建制と教皇の権力への危険が及ばぬレトロな関心をもった当時のゴシック小説の大部分とは異

なり、メアリー・シェリーの小説は理性の時代に設定されていて…〔中略〕…とりわけ近代的な自由と責任が生じる神なき世界を描いている。そこから発展する神話は、人間が世界を再創造し、その自然の環境や受け継がれてきた社会的、政治的形態を暴力的に変革し、そして自らを作り直すという責任を負う時代の新しい問題に、くりかえし向き合うことになる。 (Baldick 1987: 5=1996: 21-2)

ボルディックのいうように、この小説は一方で、産業革命による科学技術的發展の予期せぬ産物=被造物の物語を描いている。つまり小説は、自然科学の物理的-機械的世界観を支えるような思想的基盤、すなわち、外的自然を「改善することによって、人間の理性と悟性はどこまでも向上し、その無限の知的、道徳的成長を助けるという人間の完全可能性論の基盤」(鈴木里奈 2019: 33)を、根底から覆す物語である。こうした批判のあり方は、資本主義的市場経済を支える理性や道徳を盲目的に信奉する新自由主義、ならびにその実践主体であるホモ・エコノミクスに対する、ブラウンの批判とも共鳴する。

しかしそれだけではない。ボルディックが続けているように、この小説はまた、「理性の時代」たる近代を舞台としながらも、同時に「神話」的要素も兼ね備えているのである。一般にはあまり知られていないかもしれないが、この小説には、「あるいは現代のプロメテウス (or, The Modern Prometheus)」という副題が付けられている。つまりあの物語には、ギリシア神話に登場する神族の1人であり、人間を創造し、天上の火を盗み人間に与えた罰で苦役を与えられたプロメテウスの姿が重ね合わされているのである。

ところで「プロメテウス」と聞くと、生命の創造という営みから、一般にはヴィクターを現代のプロメテウスと捉えたいくなるかもしれない。だが廣野由美子のいうように、ヴィクターは「プロメテウスのように、神のいわれない圧制に苦しんで反抗してい

るのではなく、自らの過ちを後悔しているだけである。したがって、フランケンシュタインの物語は、ゼウスの存在との対峙という側面を持たないと言える」（廣野 2019: 83-4）。つまり、ボルディック（1987: 46=1996: 78-9）もいうように、むしろ被造物の姿に「現代のプロメテウス」を読み取るべきであろう。というのも、「ゼウスの存在と対峙すること、つまり、隷属を嫌い、精神の自由を求めて反抗することを試みたのは、フランケンシュタインではなく、むしろ怪物ではなかったか」（廣野 2019: 84）と考えられるからである<sup>5)</sup>。

現代の反動的生き物もまた、「自由」を求め、自らを束縛する民主主義的諸価値に反抗を挑む。しかしその姿は、同じく隷属を嫌いつつも（社会主義に対する批判によって）あくまでファシズムに至る「隷属への道」（Hayek 1944=[1992] 2008）を危険視したハイエクとは全く異なる態度であった。ブラウンはその点に触れて次のように述べている。

ちょうどマルクス主義の致命的な弱点が、（マルクスによって派生的なものまたは超構造的なものとして退けられた）政治権力の恒久的な複雑性を無視したことであったように、新自由主義者が夢見たものは、それ自身の悪夢へと転化してしまった——すなわち、神話を利用する（myth-mongering）怒った大衆によって支えられる権威主義的政治文化へと転化した。（NF 34=91 訳文を一部改めた）

下線部にあるように、ブラウンにとって反動的生き物の姿は、伝統的な諸価値や道徳の助けを借りながら、自らを支え現代社会を覆う新自由主義的理性を非歴史的な必然の物語＝「神話」と捉える姿に映った<sup>6)</sup>。まさにそれは、近代という時代を彩る〈理性〉と、反復的に世界と自らを（再）創造するとともに外的自然や社会的－政治的諸形態を暴力的に変革し続ける非歴史的な〈神話〉とを併せ持った、あの被造物の姿に他ならない。新自由主義的理性は神

話によって正当化され、そしてまた神話は新自由主義的理性によって正当化される——しかも、ルサンチマンと脱昇華された攻撃性という強大かつ野蛮な情動的エネルギーを伴いながら。

理性、神話、野蛮、そして反転的帰結——これらのワードを批判理論の文脈に乗せたとき、自ずと浮かび上がるのが『啓蒙の弁証法』であろう。ブラウンが跡付けた新自由主義的理性の論理と帰結は、あの批判理論の記念碑的著作が明らかにしようとした啓蒙的理性の論理と帰結に驚くほど似ている。まさにそれは「現代版・啓蒙の弁証法」とでも呼べるほどではないかと筆者はみている。次章ではこの点について詳細に考えていきたい。

#### 4. 「現代版・啓蒙の弁証法」としてのフランケンシュタイン？

##### (1) 『啓蒙の弁証法』における歴史哲学的ライトモチーフと2つのテーゼ

既述のように『啓蒙の弁証法』の歴史哲学的ライトモチーフは、“野蛮からの解放をもたらすはずの啓蒙（的理性）の理念が野蛮へと転落していく過程”の解明であった。『啓蒙の弁証法』の冒頭に記された、「何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代わりに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」（Horkheimer und Adorno 1947: 5=2007: 7 以下 DA と略記）という一節はあまりに有名であろう。ホルクハイマーとアドルノは、ナチスによる非人間的な暴虐行為と亡命先アメリカでの大衆文化産業の進展という複雑かつ困難な時代状況のなかに、そうした啓蒙（的理性）をめぐる野蛮への転落過程を読み取ろうとしたのである。本章ではまず、かかる記念碑的著作の理論的基礎をなす主論文「啓蒙の概念」（DA 13-57=21-99）を中心に、著作全体を貫く2つの重要なテーゼ——「すでに神話が啓蒙である」と「啓蒙は神話に退化する」——の意味するところを端的におさえておきたい<sup>7)</sup>。

そもそも「啓蒙」とは何か。ホルクハイマーとア

ドルノによると、「啓蒙のプログラムは、世界を呪術から解放することであった。神話を解体し、知識によって空想の権威を失墜させることこそ、啓蒙の意図したことであった」(DA 13=23)という。「アニミズムの根絶」(DA 15=26)とも捉えられるこの「世界の呪術からの解放」は、神々に対する嘲笑という形で、古代ギリシアの哲学(クセノパネス)において既に見られるものではあった。とはいえ、今や「勝ち誇った凶徴に輝いている」(DA 13=23)ように見えるかかる啓蒙のプログラムは、まさにヴェーバーが「脱呪術化」として定式化した事実を示されるように、「近代」を象徴する合理化の過程にその具体的かつ決定的な働きを確認することができる。つまり、近代を象徴する様々な自然科学的技術が、人間を取り巻く外的自然を分析し、操作し、そしてまた支配することで、脱呪術化を本格的に成し遂げようとした。そうして人間存在と世界に対する啓蒙の担い手たる近代性は、「さまざまな形象の持つ多様性は位置と配列へ、歴史は事実へ、諸事物は物質へと」(DA 17=29)変換できる「世界の計算可能性の図式」(DA 17=29)を獲得し、外的自然を単なる抽象的な客体と捉える「道具的理性」の形態へと必然的に変容を遂げることとなったのである。

こうして「数」を啓蒙の規準とする計算可能性は——先の「勝ち誇った凶徴」という表現に見られるように——ナチスをはじめとする当時のヨーロッパを席卷した全体主義的政治体制のみならず、市場における商品交換や市民的正義の原理ともなることで、市民社会に幅広く浸透することとなる(DA 17-8=30)。しかしその一方で、ホルクハイマーとアドルノは、かかる道具的理性と化した近代性の只中に人間自身にとって看過できない逆説を見出す。それは、道具的理性と化した近代性が、今度は自分自身をも同様に操作し支配してしまうという事態である。というのも、〈外的自然〉の場合と同じく人間の〈内的自然〉もまた、近代性にとっては同じ「自然」である以上、単なる抽象的な客体と捉えられるからである。かくして「質を喪失した自然は、たん

に分割されるだけの混沌とした素材になり、全能の自己は、たんなる所有に、抽象的な同一性になる」(DA 20=34)。ホルクハイマーとアドルノは、こうした啓蒙の自然支配をめぐる逆説的二重構造を見出したうえで、そこからさらなる決定的な逆説を指摘する。彼らはホメロスの叙事詩『オデュッセイア』に着目し、その神話的物語の中に、故郷を目指して航海を始めたオデュッセウスが自らを誘惑する外的自然(=女神セイレーン)を手なずけ支配すべく自己の内なる自然(=セイレーンの幻惑への屈服)を犠牲にするといった、啓蒙の(二重構造の)源泉を見出すのである。ここに『啓蒙の弁証法』の第1テーゼである、「すでに神話が啓蒙である」(DA 10=15)の意味するところが確認できる。

加えて、オデュッセウスに見られる内的自然の犠牲ないし「抑圧の内向」(DA 88=145)は、ホルクハイマーとアドルノによると「自己保存」の原理によって駆動されている。しかしながら、常に近代に至る歴史を振り返ると、人間を自己保存に縛りつけるような「脅威に充ちた自然に対する恐怖心は、アニミズム的なたんなる迷信へと格下げされてしま」(DA 45=70)う運命にある。そして「ついに自己保存が自動化されるに及んで、生産の管理者として理性の遺産を相続したもの、相続権を剥奪された者 [理性]を憚って、今や理性に恐れを抱くようになった者たちの手によって、理性は解任される仕儀に立ち至る」(DA 45=70-1 [ ]内は訳者による)。つまり、啓蒙の発展とそれに伴う自己保存の原理の強化は、前世紀のファシストらがこぞって「新たな神話」の到来を告げていたことに象徴されるように、あるうことか啓蒙自体が新たな神話ないし野蛮へと転落する危険性をもたらすのである。

自然を破壊することによって自然の強制力を打破しようとする試みは、いずれもいっそう深く自然の強制力の中に落ち込んでいくだけである。ヨーロッパ文明が辿ってきた軌跡は、まさしくそのことを示している。(DA 24=39)

ここに『啓蒙の弁証法』の第2テーゼである、「啓蒙は神話に退化する」(DA 10=15)が指し示す事態が現れることになる。

## (2) 現代版・啓蒙の弁証法? : 市場的理性あるいは「理性的なもの」という野蛮

以上が『啓蒙の弁証法』の理論的基盤をなす主論文「啓蒙の概念」の概要である。上記の内容を踏まえたうえで、今いちどブラウンの新自由主義論に目を向けよう。

ブラウンが見出した新自由主義の反転的帰結は、筆者の目からすると、まさに上に記した『啓蒙の弁証法』の歴史哲学的ライトモチーフと2つのテーゼそのものを体現していると考えられる。新自由主義はまず、それが「理性」の形をとる以上、ブラウンも言うように「生産的で世界創造的である」(NF 12=69)る。つまり(ハイエクがそうであったように)民主主義的規範や諸価値を体現する「社会的なもの」を、「神秘的で、一貫性がなく、危険」(NF 13=71)なものともみずことで、そうしたアニミズム的な神話的世界観を打開するものとして新自由主義的理性は登場してきたのである。まさにそれは現代の啓蒙的理性の姿といえるだろう。

しかし既に述べたように、新自由主義的理性はまた、神話によって支えられ正当化される。つまり、伝統的な道徳や諸価値の力を神話的原動力として借用することで、新自由主義的理性は野蛮な情動的エネルギー(ルサンチマン)を伴う爆発的な勢力となるのである。これは『啓蒙の弁証法』の第2テーゼ「啓蒙は神話に退化する」に相当する。

とはいえそれは、神話への不可逆的な退化となるわけではない。こちらも既に前章(2)で述べたように、新自由主義的理性は、それが伝統的道徳や諸価値と変幻自在に密着することが可能である限り、ブラウンの言うように「理性的なもの」であることをやめないからである。そしてこうした神話と新自由主義的理性とをめぐるとヒリズムの密着は、自己の解放や超克を目指すのではなく、独特の抑圧メカニ

ズム、すなわち抑圧的脱昇華と結びつく。それは、マルクーゼによって内的自然の地位に置かれたエロスを、一方では抑圧(圧縮)すると同時に、他方では——あくまで自己保存の手段としての「自由」の確保に適う範囲ではあるが——外的自然に対する攻撃-破壊欲動たるタナトスと一部混じり合う形で放出する。〈内的自然の抑圧〉と〈外的自然の攻撃・破壊〉はこうして両立し相互強化を図るのである。そしてこのことは、『啓蒙の弁証法』の第1テーゼ「すでに神話が啓蒙である」で論じられたオデュッセウスの姿に重なるだろう。

ホルクハイマーとアドルノは、本章の冒頭でも述べたように、啓蒙(的理性)をめぐる野蛮(=神話)への転落過程を、ナチスによる非人間的な暴虐行為と亡命先アメリカでの大衆文化産業の進展という時代状況の最中に書き上げた。彼らの目には、どちらも近代理性主義を特徴づける「啓蒙」の限界と欺瞞を示す事態に映ったのである。しかしながら、かつて彼らが打ち立てた批判理論の究極地点ともいえる歴史哲学的ライトモチーフと2つのテーゼは、これまで述べてきたように、今なお十分な説得力を有しているといえるだろう。ブラウンが明らかにした現代の新自由主義的理性の反転的帰結は、まさに前世紀のあの戦火の中で剥き出しとなった啓蒙的理性の自己破壊的帰結を再びトレースしたものと捉えられるのである。

## 5. 残された課題：批判理論としての“新しさ”はどこに見出されるのか?

### (1) 『啓蒙の弁証法』を超える必要性

本稿では、現下の新自由主義時代において「新たな批判理論」を打ち立てるための糸口を探るべく、ブラウンの「フランケンシュタイン」論文についてこれまで検討を進めてきた。その結果明らかとなったのは、ブラウンが当該論文で見出した新自由主義的理性の反転的帰結が、上記のように、かつて『啓蒙の弁証法』において見出された啓蒙的理性の自己破

壞的帰結と同じ歴史哲学的原理を持っているということであった。つまりそれは、私たちの生きている現下の新自由主義時代が、ホルクハイマーとアドルノが生き(延び)たあの破滅的な時代と同じ帰結への道を今まさに歩んでいるということであり、さらにはブラウン自身が容易にオルタナティブを見出すことは困難だと述べているように、その破滅への道は相当深刻なところまで進んでいるということの意味する。ブラウンが主たる分析対象としたアメリカでは、「フランケンシュタイン」論文の発表から3年後、トランプ前大統領の支持者らによる連邦議会議事堂への乱入・襲撃事件が発生した(2021年1月)。あの事件はまさに、権威主義的な政治体制の下で「自由」を希求した反動的主体による民主主義への具現化された破壊行為であり、そしてまた、新自由主義的な〈理性〉に宿っていた〈野蛮〉な情動的エネルギーがついには剥き出しとなった出来事として理解することができるだろう。トランプ退任以降も、彼を支持し大統領復帰を願う声は依然として根強い。

このように『啓蒙の弁証法』と同様の論理構造を導き出したブラウンの新自由主義批判は、私たちが生きている時代の現在進行形の危機的状況を概ね精確に捉えたものではないかと筆者は評価している。しかし一方で、根本的な疑問も残る。それは、本稿で導き出された『啓蒙の弁証法』との連続性を、そもそもブラウンの目指していた“新たな”批判理論の成果そのものとして解釈してもよいのかという疑問である。というのも、時代こそ異なるものの、理性をめぐる自己破壊的な反転的帰結といった内容は、ホルクハイマーとアドルノによる批判理論のモチーフと論理構造上は何ら変わらない、つまり新しいところは何もないと考えることもできるからである。時代が逆戻りになった証左だとして、その退行具合を反転的帰結と重ね合わせながら「新しい時代の新たな危機」と呼ぶこともできるかもしれない。しかしながら、そうした結論で満足しては、ブラウン自身が「フランケンシュタイン」論文のなかで警告していた以下のような状況に陥る危険性が極めて

高いのではないだろうか。

現在を説明しようとして自分たちの手持ちの批判理論に依拠しようとするほど、説明は逆説的に、自分たちの批判理論が説明できない範囲のさらに手前にとどまる可能性もある。(NF 8=66)

筆者は第1章の冒頭で、本稿の目的を、現下の新自由主義時代において「新たな批判理論」を打ち立てるための糸口を探ることと述べた。「糸口」と控えめに表現したのは、これまでに明らかにした内容が「新たな批判理論」の全容だとは全く考えていないからである。『啓蒙の弁証法』との連続性はあくまで糸口にすぎないのであり、それを「私たちの新しい時代」を説明する根本原理だと誤って解釈してしまうのは、ブラウンも警告するように、我々研究者の側の知的後退をむしろ招いてしまうことになりかねない。

それでは、『啓蒙の弁証法』との連続性が「新たな批判理論」を打ち立てるための糸口だとするならば、そこからいかなる理論的發展がさらに考えられるのだろうか。残念ながら現時点では構想の段階と言わざるを得ないが、カギを握っているのはハイエクではないかと筆者は考えている。本稿ではさほど詳しく触れてはいないが、ブラウンは「フランケンシュタイン」論文のなかで、ニーチェとマルクーゼに並ぶ新自由主義理解のための歴史的源流としてハイエクを位置づけており、「新自由主義的な構築主義のプロジェクトに対し、その原理を遍在的に統治するものとするように駆り立て」(NF 17=74)た理論的支柱としてとりわけ重要視している。筆者は、この新自由主義の生みの親とも称されるハイエクの理論的ならびに思想的スタンスに、私たちが生きている新自由主義という時代ならではの「新たな批判理論」の展開可能性が宿っているのではないかと考えている。構想段階のため甚だ不完全ではあるが、最後にその点について述べて稿を閉じたい。

## (2) 〈反理性〉から〈理性〉への変容

第2章の(1)でも述べたように、ブラウンはハイエクを、新自由主義というものを思想と理論の両次元において生み出した人物の一人と捉えていた。その限りでハイエクは、ブラウンが明らかにした新自由主義的理性の野蛮への転落という反転的帰結に対し、責任の一端を負っていると考えられるだろう。しかしその一方で、ハイエクにはそうした反転的帰結とは異質の、むしろそれに対立するともいえる思想が貫かれていたことも無視できない。ブラウンの以下の文章においてそのことは示されている。

ハイエクにとって社会的なものの領域に対する信念をかくも極悪なものにしたのは、社会的なものが、<sup>デザイン</sup>設計によって正義と秩序とを作ろうとする試みに避けがたく導くからである。それは、市場と道徳との結合によってもたらされるダイナミックな秩序を次々と掘り崩してしまう。市場と道徳はともに理性ないし意志からは発せられるものではなく、むしろいずれも自生的に発展するものである。(NF 13-4=71 訳文を一部改めた)

ハイエクの新自由主義思想が、「社会的なもの」を「政治的なもの」とともに隷属への道として危険視するものであったこと、そしてそこから一線を画した市場の領域を、道徳との結合によって秩序を自生的に発展させよう領域として擁護するものであったことは、既に述べた。だがここでさらに重要なのは、上の引用文にあるように、ハイエクにとって「社会的なもの」が殊更に危険視されていた理由が、そこでもたらされる秩序が意図的な「<sup>デザイン</sup>設計」によって作り出されると考えられていたからであったという点である。そしてその意図的な<sup>デザイン</sup>設計は、下線部にあるように、ハイエクの目には「理性」から発せられるものと映った。つまりハイエクにとって「理性」は、その行使される範囲を適切に限定しない限り<sup>8)</sup>、人々

を盲目的な社会への信奉とファシズム的隷属に至らしめるような計画性と強制性を発動するものと考えられていたのである。だからこそ彼は、そうした計画性と強制性とは無縁の、自生的な秩序形成の領域である市場と道徳の結合の場を守ろうとしたのであった。

こうした理性に対する徹底して厳しい態度は、ハイエクの思想的スタンスを形作る重要な一側面としてよく知られている。ではそうになると、新自由主義的理性の野蛮への転落という反転的帰結を跡付けたブラウンの議論は、ある意味でそれとは対になるような歴史的過程をも同時に視野に収めるものであったと考えられるのではないか。すなわちそれは、上記のように、全面否定とまでは言えないものの〈反理性〉とでも呼ぶべき立場から導き出されたハイエクの新自由主義思想が、現実世界において一転して全面的な〈理性〉へと化していったプロセスである。この〈反理性〉から〈理性〉への変容があったうえで、次にその〈理性〉が野蛮という形での〈非理性〉へと転落していく反転的帰結が続くというわけである。

この点に関わって、少々長いがブラウンは以下のように述べている。

私は、ハイエクや他の新自由主義者たちが、今日の大膽となり勢力を増している極右によって、移民、イスラム教徒、黒人、ユダヤ人、クイアの人々、そして女性への脱抑制的な攻撃をする<sup>9)</sup>と予想ないし主張したと言いたいわけではない。ポイントはむしろ、こうした展開は、部分的には新自由主義的理性の帰結であることである。つまり、個人と同様に企業に対して私的なものの領域や要求を拡張し、そして（市場に対峙する）政治的・社会的正義を拒絶する新自由主義的理性の帰結なのである。アンドリュー・リスターが論じるように、仮にハイエクの「社会的正義ないし分配的正義に対する批判がきわめて狭い標的に絞られたもの」——市場の帰結に対

する国家による経済的干渉——であったとすれば、それが私たちの時代の政治的合理性の本分(part)となったときに、その領野は拡大したのである。(NF 21=78-9 訳文を一部改めた)

少し長いので順を追って内容を見ていこう。前半ではまず、今日における極右勢力によるマイノリティや社会的弱者への攻撃が、「部分的には」本稿で再三述べた新自由主義的理性の反転的帰結によるものと述べられている。ここで重要なのが“部分的”という表現である。新自由主義的理性の反転的帰結が部分的な要因であるならば、残りの要因はどこに求められるのか。後半には、ハイエクによる「社会的正義ないし分配的正義に対する批判」という記述がある。だが引用文の冒頭にあるように、ハイエク自身は今日における極右勢力による攻撃を予想ないし主張していたわけではなかった。つまり残りの要因は、ハイエク自身に直接求められるというよりは、ハイエクにおいては狭い標的に絞られていたところの批判、すなわち、「社会的なもの」の領域から正義がもたらされたり、国家による経済的干渉に象徴されるように「政治的なもの」の領域から分配という名の正義がもたらされたりするような事態への批判が、(あろうことか)「私たちの時代の政治的合理性」として幅広く取り入れられるに至った経緯に求められる、ということである。それは言い換えれば、ハイエクによる「社会的なもの」と「政治的なもの」とに対する反理性的立場からの批判が、二段逆説的にも、“合理的な政治スローガン”として取り入れられ全領域へと拡大していくという経緯である。具体的には1980年代に本格化した経済政策としての新自由主義化を指すものと考えられるが、こうした〈反理性〉の立場からの新自由主義思想が合理的な政策へと巧みに変換されていった経緯こそが、ブラウンにおいては、その後続く〈理性〉としての新自由主義の反転的帰結と並んで、「現代の権威主義」を生み出した要因と捉えられているのである。

新自由主義という文脈における〈反理性〉から〈理

性〉への変容過程の解明——このプロジェクトをどのように名付けるべきかはさておき、ブラウンの新自由主義論を「新たな批判理論」として本格的に再構成する道はそこから切り拓けるのではないかと筆者は考えている。と同時に、かつてホルクハイマーとアドルノが陥ったアポリアから脱する新たな方途も見つかるかもしれない。彼らが苦心して生み出した『啓蒙の弁証法』は、批判理論を代表する歴史哲学の書として唯一無比の魅力に溢れるものであった。しかし他方では、「啓蒙」という概念そのものの内部に自己破壊的契機を見出すといったラディカルさゆえに、理性によって駆動されるあらゆる知的活動が無効化される危険性を孕むものであった。中川久嗣(1994: 37)なども指摘するように、「すでに神話が啓蒙である」という第1テーゼによって「啓蒙」という概念から「近代」という一時代の固有性が失われたことも相まって、ホルクハイマーとアドルノは、「理性」という概念に立脚しながら近代的諸課題を内在的に克服する道を容易に見出すことのできないアポリアへと陥ってしまったのである。

しかし、ブラウンの新自由主義批判は、〈反理性〉から〈理性〉への変容過程をも視野に収めた新しい批判理論の歴史哲学である。それは一方で、新自由主義的理性という名の暴力の発露へと至った現実の歴史的経緯を批判的に跡付けるものでありながらも、また他方では、まったく異質の理性へと至りえた可能性を歴史遡及的に模索するものでもあるのだ。そのような作業を通じて、別様に設計しえた抵抗とオルタナティヴの拠点<sup>デザイン</sup>を遡って見出すこと——この難問に引き続き取り組むことが、筆者に課せられた課題である。

#### 注

- 1) 現時点での最新の成果は『新自由主義の廃墟で——真実の終わりりと民主主義の未来』(Brown 2019=2022)にまとめられている。この著書は、本稿でメインに取り上げる論文「新自由主義のフランケンシュタイン」に一部依拠しているが、紙幅



の関係上、本論で詳しく内容を検討することはできない。

- 2) 他に批判的な論者としては中井亜佐子（2021）などが挙げられる。『デモスの崩壊』の翻訳者でもある中井はフェミニズムの観点から本書を検討し、ブラウンのいう人的資本への変換が専ら「男性」に期待されたものと考えられている点を疑問視したうえで、ブラウンにおいては新自由主義の落伍者、ひいては「新しいかたちのジェンダー的従属化」（UD 107=121）の象徴と捉えられている貧困状態に陥った女性（特にシングルマザー）こそが、新自由主義的主体化にむしろ最も適応した例ではないかと述べている。中井が依拠しているのは、女性の従属化と（再）生産活動の搾取——いわゆる「主婦化」——をグローバル資本主義における蓄積プロセスの源泉と捉え、彼女らを労働者ではなく所得の創出活動に従事する「小さな企業家」と同列の存在と捉えたかつてのマルクス主義フェミニズムであるが、中井はブラウンをこうした議論に引きつけつつ批判的に検討することで、反新自由主義とフェミニズムとの今後の協働可能性を見出すべきと考えている。中井の批判は、ブラウンの議論を「新自由主義的主体が『主婦化』されたホモ・エコノミクスであるという現状認識」（中井 2021: 384）から検討するものであり、その点で箱田らと同じく現実的分析理論としての経験的妥当性を問うものであるが、しかし同時に、「フェミニズムを新自由主義批判の思想として再評価すること」（中井 2021: 373）を目指したのもである。このように「思想」という面からオルタナティブな未来への協働可能性を模索しようとしている点は、本稿の問題関心とも連なるものであり、また内容としても興味深い。だが、中井自身も注釈を付けているように（中井 2021: 386）、マルクス主義フェミニズムには様々な理論上の限界も指摘されているため一定の留意も必要ではないかと思われる。
- 3) あるいは、①に関しては次のような見方も可能かもしれない。それは、ハイエクのいう「相互依存の自生的秩序」を、個々の材料の寄せ集めによって作り出された被造物の姿に重ね合わせるという見方である。ブラウンも繰り返し触れているよ

うに、ハイエクは個々人の「自由」を最大限擁護するだけでなく、そうした個人的自由の間の競争的相互関係による市場と道徳をめぐる自生的秩序の発展プロセスも重要視していた。こうした秩序の「自生性」に期待することで、ハイエクはファシズムとの距離を保つことができると考えたのである。

しかしながら、実際に自生されたのは、ハイエクが全く想定していなかった、怒りに満ち、非道徳的で、復讐心にまみれた、反民主主義的で権威主義的な生き物であった。この最後の点は、次に本論で述べる②の論点につながっていく。

- 4) ここで見逃してはならないのは、反動的生き物が自らの創造主を攻撃対象とするのは、決して故なきことではないという点である。第2章の(2)でも述べたように、彼らは新自由主義的知識人たちによって生み出された被造物であると同時に、その後に現実化した経済政策としての新自由主義のまさしく犠牲者でもあったのだ。反動的生き物は勝手気ままに破壊的存在となったわけではなく、そこには明確な理由があるのである。
- 5) さらにいうと、ギリシア神話のプロメテウスを象徴する「火の二面性」に直面したのも被造物のほうである。被造物が最初に覚えて使えるようになった言葉は「火」であり、初めて火を見つけたときはその暖かさに驚喜し（Shelley [1818] 1998: 81=2015: 209）、後になると小屋に火を放つことでその破壊性を体現することになる（Shelley [1818] 1998: 113 =2015: 273）。ちなみに「フランケンシュタイン」論文にも、現代の新自由主義や反動的生き物を取り巻く「火」のイメージが記されている箇所がある。たとえば以下の文章がそうである。
- 同時にまた、ニーチェは私たちにこの自由の「祝祭的な性質」を思い出させるだろう——それは、挑発と誇張による楽しみ、他者に恥をかかせたり（「誰かが傷ついた」と言って）苦しませたりする楽しみ、誰かが燃やされている焚火を囲んで踊るといった楽しみによって喜ばれるのである。（NF 28=86）

こうした、「文明や地球の未来が燃え落ちることを祝う自由の祝祭」（NF 29=86）という表現から、文明を築き人々に喜びを与える手段であったはず

の「火」によって地球が燃え落ちてしまうといった、現代の新自由主義における新たなプロメテウスの神話を読み取ることもできるのではないだろうか。

- 6) 付言すると、ブラウンのいう反動的生き物が好んで利用する「神話」は、その支えとする伝統的な価値や道徳としてとりわけ異性愛主義的で家父長的な「家族」主義を強調するものである点が特徴である。このことは、『新自由主義の廃墟で』(Brown 2019=2022)の中の以下のような文章で示されている。

かくして、新自由主義的な経済政策の作因は、失われた国民という姿に投影された、彼ら自身の損失のイメージによって動員されたのである。この自分たちの姿というものは、家族が幸福で、完璧で、異性愛的であった神話的な過去、女性や民族的マイノリティが分をわきまえており、近隣は秩序だって安全で均質的で、ヘロインは黒人の問題であり、テロリズムは国土には入りこんでおらず、そして覇権を握るキリスト教と白人性が明確なアイデンティティ、権力、そして国家と西洋の誇りの構成要素となっていたような神話的な過去に訴えるものであった。(Brown 2019: 5=2022: 11-2)

もっとも、ここに挙げられている「神話的な過去」とは、偽造された伝統的価値や道徳にすぎない。つまり、ブラウンの言葉を借りれば、「伝統から根こぎにされてしまった伝統的価値観」(Brown 2019: 119=2022: 159)である。筆者が本論にて、反動的生き物が利用する神話を「非歴史的な必然の物語」と呼んだのは、まさにこの伝統という歴史性を剥奪された伝統的価値観が偽造され称揚されている事実を強調したいがためである。

- 7) 『啓蒙の弁証法』の概要をまとめるにあたっては、上野成利ほか編(2023)なども参照した。
- 8) 厳密に言うハイエクは、「理性の使用に適切な限界を求める必要がある」(Hayek 1960: 69=[1986] 2007: 99)という立場をとっている。その理由について、ハイエクは以下のように述べている。

理性は疑いもなく人間のもっとも尊い財産である。われわれの議論が明らかにしようとし

ているのは単に理性は全能でないこと、そしてそれが自身の主人となってみずからの発展を支配できるという信念はやがて自らを破壊するであろうということである。(Hayek 1960: 69=[1986] 2007: 99-100)

この文章からは、理性の自己破壊的危険性を指摘している点で『啓蒙の弁証法』との共通点を見出すこともできよう。そして実際にハイエクが危険視したとおり、理性と化した新自由主義は野蛮への転落という自己破壊的帰結へと向かっている。その一方でハイエクは、上記のように適切な限界が設けられる限り理性の使用を認めていた。この条件付きで理性を容認するという態度をどう評価すべきか、すなわち、その後の理性としての新自由主義へと至る歴史的必然性をすでに孕むものであったと批判的に受け止めるべきか、はたまた本論の最後に述べるように、今日における抵抗とオルタナティブの拠点となりうるようなまったく異質の理性へと導く可能性を有するものであったと肯定的に受け止めるべきなのかは、今後の課題として引き取りたい。

## 文献

- Baldick, C., 1987, *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-century Writing*, New York: Oxford University Press. (=1996, 谷内田浩正・西本あづさ・山本秀行訳『フランケンシュタインの影の下に』国書刊行会.)
- Brown, W., 2006, *Regulating Aversion: Tolerance in the Age of Identity and Empire*, New Jersey: Princeton University Press. (=2010, 向山恭一訳『寛容の帝国——現代リベラリズム批判』法政大学出版局.)
- , 2015, *Undoing the Demos: Neoliberalism's Stealth Revolution*, New York: Zone Books. (=2017, 中井亜佐子訳『いかにして民主主義は失われていくのか——新自由主義の見えざる攻撃』みすず書房.)
- , 2018, "Neoliberalism's Frankenstein: Authoritarian Freedom in Twenty-first Century "Democracies", " in: *Authoritarianism: Three Inquiries in Critical Theory*, Chicago and

- London: University of Chicago Press, 7-43. (= 2021, 日暮雅夫・藤本ヨシタカ訳「新自由主義のフランケンシュタイン——21世紀『民主主義』における権威主義的自由」M. ジェイ・日暮雅夫共編『アメリカ批判理論——新自由主義への応答』見洋書房, 65-99.)
- , 2019, *In the Ruins of Neoliberalism: The Rise of Antidemocratic Politics in the West*, New York: Columbia University Press. (=2022, 河野真太郎訳『新自由主義の廃墟で——真実の終わり』と民主主義の未来』人文書院.)
- 出口剛司, 2002『エーリッヒ・フロム——希望なき時代の希望』新曜社.
- Foucault, M., 2004, *Naissance de la biopolitique: Cours au Collège de France 1978-1979*, édition établie sous la direction de François Ewald et Alessandro Fontana, par Michel Senellart, Paris: Gallimard. (=2008, 慎改康之訳『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義1978-1979年度』筑摩書房.)
- 箱田徹, 2018「人的資本批判としての新自由主義論——ウェンディ・ブラウン『いかにして民主主義は失われていくのか』を読む』『ピープルズプラン』79: 57-67.
- Hayek, F., 1944, *The Road to Serfdom*, Chicago: University of Chicago Press. (= [1992] 2008, 西山千明訳『隷属への道 (新版ハイエク全集第1期別巻)』春秋社.)
- , 1960, *The Constitution of Liberty: Part I The Value of Freedom*, London: Routledge & Kegan Paul. (= [1986] 2007, 気賀健三・古賀勝次郎訳『自由の条件 I 自由の価値 (新版ハイエク全集第1期第5巻)』春秋社.)
- 日暮雅夫, 2021「解題 新自由主義から権威主義の批判へ」M. ジェイ・日暮雅夫共編『アメリカ批判理論——新自由主義への応答』見洋書房, 199-222.
- 廣野由美子, 2019「『現代のプロメテウス』とは何か? ——『フランケンシュタイン』再読」日本シェリー研究センター編『フランケンシュタインの世紀』
- 大阪教育図書株式会社, 77-89.
- Horkheimer, M. und Adorno, T. W., 1947, *Dialektik der Aufklärung: philosophische Fragmente*, Amsterdam: Querido Verlag. (=2007, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法——哲学的断想』岩波書店 (岩波文庫).)
- Jay, M., 1973, *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research, 1923-1950*, Boston: Little, Brown & Company. (=1975, 荒川幾男訳『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史: 1923-1950』みすず書房.)
- Marcuse, H., 1964, *One Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society*, London: Routledge & K. Paul. (=1980, 生松敬三・三沢謙一訳『一次元的人間——先進産業社会におけるイデオロギーの研究』河出書房新社.)
- Markell, P., 2017, "Neoliberalism's Uneven Revolution: Reflections on Wendy Brown's Undoing the Demos," *Theory & Event*, 20(2): 520-7.
- 中川久嗣, 1994「啓蒙の弁証法と文明の両義性について」『文明研究』12: 33-48.
- 中井亜佐子, 2021「『主婦化』するホモ・エコノミクス——新自由主義の主体の変容と未来」小泉義之・立木康介編『フォーコー研究』岩波書店, 372-86.
- 佐貫浩, 2019「書評 ウェンディ・ブラウン著/中井亜佐子訳『いかにして民主主義は失われていくのか——新自由主義の見えざる攻撃』」『日本教育政策学会年報』26: 203-7.
- Shelley, M., [1818] 1998, *Frankenstein, or, The Modern Prometheus: the 1818 text*, New York: Oxford University Press. (=2015, 芹澤恵訳『フランケンシュタイン』新潮社 (新潮文庫).)
- 鈴木里奈, 2019「『フランケンシュタイン』における自然科学と決定論」日本シェリー研究センター編『フランケンシュタインの世紀』大阪教育図書株式会社, 31-43.
- 上野成利・高幣秀知・細見和之編, 2023『啓蒙の弁証法』を読む』岩波書店.

Toward a New Critical Theory for Our New Age :  
Reading Wendy Brown's Criticism of Neoliberalism from  
the Viewpoint of "Dialectic of Enlightenment"

FUJIMOTO Yoshitaka<sup>i</sup>

**Abstract :** In her representative book *Undoing the Demos*, Wendy Brown, one of America's leading political theorists, presented neoliberalism as "a normative order of reason," following Michel Foucault, and clarified the process that neoliberal competitive norms had been taken not only into the market economy but also into national technology of governance. While this book has attracted considerable attention as research clarifying neoliberalism's destructive impact on democracy and every dimension of human life so far, she developed a more elaborate criticism of neoliberalism in her new article published three years after *Undoing the Demos*. The article, with the goal of developing "a new critical theory for our new age," discusses how the neoliberal reason that Foucault once emphasized has transformed into "authoritarianism in the 21st century." In this paper, for the purpose of finding a clue to establish "a new critical theory" for our current neoliberal age, the author clarifies the reason why Brown's article is titled "Neoliberalism's Frankenstein," along with its significance. The author considers that this title implies a situation of "the fall of neoliberal reason into barbarism" which should be called "the new version of Dialectic of Enlightenment."

**Keywords :** Wendy Brown, new critical theory, neoliberal reason, authoritarian freedom, Frankenstein, Dialectic of Enlightenment

---

<sup>i</sup> Visiting Researcher, The Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University